

大学における英語教育の意義

小 泉 和 弘

The Meaning of English Education in A College

Kazuhiro Koizumi

太平洋戦争中は、『鬼畜英米』の言葉でもわかるように、英語の本を読むことも、また、英語を話すことも禁止されていた。ところが、終戦を境に、アメリカ軍の監視下において、戦後の英語教育は始まり発展してきた。新制大学が発足し40年の歳月が流れた今日、改めて大学における英語教育、特に一般教養における英語教育の意義を考えてみることにしたい。

I. 現 状

大学の英語教育の現状を考えるにあたって、教材、カリキュラムから考察してみることにしよう。まず、カリキュラムのことから言及すると、筆者の教えている四校の大学では、一年生で週二コマ、二年生で週二コマと皆共通している。他の大学でも大体同じであると推察できるが、特に英語に力を入れている大学では、一年生で週三コマの授業があり、他の大学より多い一コマ分でLLの授業を行ったり、英文科の学生のための講読を行ったりしている大学もある。LLの設備を用いた授業では、各大学において設備の差があり、学生数の多い大きな大学では、授業の聴講希望者は抽選で決まる学校もある。各大学の予算的問題もあるのであろうが、国際化社会と言われている現在、音声による授業に対する要望が多いのであるから、せめてLL授業の希望者が全員受講できる設備は必要であると思う。また、授業を教える講師の割合に、どの大学も外国人講師の割合が増えてきたのが最近の傾向であるが、貿易黒字大国としての日本として良い方向に進んでいると思う。

次に、教材から考えると、これは1982年の調査によるものだが、『教員の専攻研究分野との関係では、本年3月に出された国大協「外国語教育に関する総合調査」特別委員会の調査報告によると、対象となった英語を含む外国語教員1,377名中、文学

65.9%, 語学19.4%, 言語学5.2%, 外国語教育4.7%などと報告されている。この教員のうち80%が専門分野に関する科目を担当したいと希望し、この80%のうちの62%が希望を実現している。教材については、「文学作品・評論」をえらぶ教員が多いのは専門性を反映しているのであろう……』『英語青年』1982年8月号と記載されており、文学教材偏重を訴えている。これに対して、1991年度の大学英語教材を出版社のカタログから分析すると、文学教材の比率はA社27.6%, B社53.5%, C社20.1%, D社47.5%となっている。1982年と比べると、はるかに文学教材偏重は減っている。特に注目すべきことは、文学教材であっても半数以上はカセットテープが完備されており、音声重視の社会的需要に答えているし、ビデオ教材も現われてきたことである。現代のハイテク機器を用いて、英語を教える時代が到来したと言える。また、これはカリキュラムとも関連していることだが、音声面を重視した授業を大学側が要請しているため、このような教材に変わりつつあることは確かである。

Ⅱ. 意 義

中学校・高等学校・大学と、大学を卒業した者は最低で八年間は英語を勉強しているのに、挨拶すらまともにできないという批判をよく耳にする。ではいったい英語教育の意義とは何なのか。特に大学教育に絞って考えてみることにしよう。

まず初めに大学における講義そのものの意義とは何かということについて考えてみたいと思う。『大学の講義とは何か』よく論議を呼ぶ題目であり、その中ではよく専門学校の講義との違いについて述べられている。専門学校の授業はよく企業などが就職させてから、即戦力として使える者がほしいという要望について答えるためのものであると言われている。

事実、専門学校の講義では、社員教育的な講義の内容、つまり、どのように作業をするか、どのように実務をこなすかと言うことを教えている。この傾向は、コンピューターや機械の整備などを教える専門学校や英会話の専門学校に特に強く現われており、まさにどのようにコンピューターを操作するのか、どのように機械を整備するのか、いかに日常よく使う英会話を話させるかということのみを教えている。

もちろん、そのようなコンピューターや機械整備を教える専門学校でも英語や数学などの科目を設けて、それらを講義の中で教えているわけである。しかし、それらは実用的な内容が中心となっている。

それに対して、大学の講義はどのような内容のものがあるかと言うと、もちろん実用的な内容もあるのだが、ほとんどの講義が基本的な内容である。大学では、勉強を

教えていると言うよりも、むしろ勉強のやり方を教えているのであるから、学校を卒業した後も、自分で勉強できるような基本を身に付けさせる講義なのである。

このように専門学校と大学での講義の違いは、明らかである。このことから、それぞれの講義の意義というものが見えてくるのである。専門学校の講義は、技術者を、ある特定の技能を持った者を育成するためのものである。そして、大学の講義は、単にその時代に使われる技術、技能を習得するにとどまらず、広い視野を持ち、さらに自分の力で成長できる、考えることのできる人間の育成を目的としている。

つまり、大学での英語の講義というものは、こういった意義を含んでいるのである。中学校や高等学校で学んできた四能（読む・書く・聞く・話す）を伸ばすだけでなく、大学では英語を通して異文化理解という目的も持っている。英語は、世界で最も多くの人が使用している言語であり、多くの国の文化、思想を反映しているのだから、単に外国語を聞きとれて、話せることが最終目標ではなく、これから社会に出るにあたって広い視野を持ち、自分でものを考え、自分の力で成長できる人間になるために役立つのである。

Ⅲ．展 望

どうすればより完成された大学での英語教育が達成できるのか。ここで、いくつかの問題点を挙げて改善の方法を模索してみることにしよう。

第一の問題点として、入学してくる学生の学力不足である。中学校の英語の時間が、週四時間から三時間に減り、高等学校でもその影響を受けて授業レベルの低下という現象が起きている。中学校で週四時間英語の授業があった当時は、中学と高校の教科書及び副読本すべて合わせて5,000語の単語が現われたが、現在では3,000語になってしまっている。3,000語程度の単語力では、とうてい論文などは読めるようにはならないし、普通の大学での英語教育は効果を期待できないと言える。この問題についての解答は二つで、ひとつは、中学校及び高等学校での英語の時限数を増やすこと、もうひとつは、大学の時限数を増やして補習すること、どちらかが必要である。理想としては前者が好ましいが、現実問題としては後者の方法で解決せねばならないと思われる。この場合、大学に入学時に共通試験を行い、あまりに学力の低い者は特別の講義を1コマ余分に受講させるようにすることである。

第二の問題点としては、中学校・高等学校・大学と一貫した教育目標が徹底されていないことである。このことは、中学校と高等学校と大学間において、あまり対話がないからである。特に、英語教育が初まる中学校での教育が大切であると思われる。

戦後、新しい教育制度が定められた際、英語教育では日常生活で読み書きや会話に不自由しない程度の英語を身につける、ということを目標に掲げられていた。ところが、学習の初期からより高度な構文・言い回しを次々と学習者に要求するようになったため、学習者に大きな負担がかかり、その結果高度な論文の読解はおろか、日常会話の能力すら身につかなくなってしまうと思われる。年齢が低いほど聞く、話すといった技能は早く習得できるのであるから、中学校では英語を聞く、話すといった技能を中心に教えるべきである。高校では、構文や表現法などを中心に、英語を読み、書きする技能を中心に教え、大学では、英語を通しての異文化理解と、論文を読めるまでの読解力をつける、といった大きな明確な目標を持つことが重要である。また、年二回程度でも良いので、中学校・高等学校・大学の教員で話し合いの場を持つべきである。

第三の問題として、大学の教員の資質を向上させることである。英会話を教えると言っても、一度も留学体験のないものでは限度がある。だから、専任の教員には最低一年間の留学をさせることである。また、大学の教員の研修のための講座を多く設け、大学の教員に受けさせることである。

第四の問題として、授業を受ける側の学生の姿勢と態度である。最近、授業中の私語が大きな問題となっているが、昔では考えられないことである。三人に一人が大学へ入るようになったのであるから、学生の質が落ちるのは仕方のないことかもしれないが、やはり大学生としての自覚を持つべきである。また、出席のためだけに授業に来て私語をしている学生が多くいるので、出席はとらずとも学生が集まるような魅力ある授業が望まれている。

(こいずみ かずひろ 本学非常勤講師 英語)